

『道徳と宗教の二源泉』における 「閉じた社会」の自然性について

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学
中根 弘之

0. 序

ベルクソンは、『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』）¹において「閉じた社会 *société close*」(DS1000)と呼ぶ契機に注目している。ベルクソンによれば、自然は我々に一定数の成員からなる社会を形成して生きることを要請し、それと同時にその社会の維持のための道徳を備え付けたという。そして、その道徳は残存し続け、どれほど文明化した社会であっても、その成員の数に限りがあるという点で、原始的な²社会と「根本的類似」(*ibid.*)を示すと考えられている。

実際、我々の文明社会も同様に閉じた社会なのである。我々が本能によって至らしめられる小集団、我々が文明社会の場に配置されているのを見出す物質上、精神上の文明の成果が消え去れば同じ本能がすぐに作り直すであろう小集団との比較において、文明社会がともても広大であったとしても無駄である。すなわち、文明社会も同様に、どんな時も、ある数の個人を包括し、他の個人を排除することを本質としている。(*ibid.* 傍点引用者)

このようにベルクソンは、自分の属する社会の成員の外部の人々に対して排除と攻撃を行わせしめる道徳が厳然と存在していることを明らかにしているのである。

勿論、我々をよりよき生に導く道徳が、この閉じた社会の諸契機によって十全に説明されるとベルクソンが考えているわけではない。人類の全てどころか「動物や植物や自然全体にまで及ぶ」(DS 1007)ものにまで目を配る「開いた魂 *l'âme ouverte*」(DS 1006)によって「開いた社会 *société ouverte*」(DS 1000)が要請され、その開いた社会で求められる道徳は、閉じた社会の道徳と対峙している。ベルクソンは、道徳の源泉に、この閉じた社会と開かれた社会が存在し、そこから発生的に道徳の展開が為されることを『二源泉』で明らかにしているのである³。したがって、閉じた社会の道徳的諸契機は我々の道徳の一端を示しこそす

れ、全体を指し示すものではないことは明らかである。しかし、問題は、この閉じた社会が自然によって要請されている点にある。この自然の要請を深く読み込むならば、一般に道徳的に賞賛される諸行為も、自身が所属している社会の一定数の成員に対して行われた場合にのみ賞賛に値するのであり、むしろ、自身の属していない社会の成員に対して行われた場合、非難される行為となる可能性がある。このことは、今日の我々の直面している諸問題、とりわけ特定の他者に対する強烈的な排除や不寛容を考える上で重要な意味を持つのではないだろうか。実際、自身が所属する社会の外部にいる他者に対してなされる排除や不寛容の事例を探すことに、我々はさほど苦勞しないはずである。今日、グローバル化の名のもとに、言語文化的、政治的、宗教的な価値観を異にする人々との共生の理念が声高に叫ばれる一方で、日本国内外を問わずその理念と全く相容れない意見を耳にする機会に事欠くことがない。こうした排除や不寛容には、それぞれ個々の歴史的な文脈にそった原因があるにしても、ここに我々はベルクソンの閉じた社会の自然性を見るのではないだろうか。本論は、ベルクソンの閉じた社会に備わる自然性を検討し、その根強さについて考察するものである。

キーワード：自然、責務、閉じた社会、エゴイズム

1. 自然が求める社会生活と責務

ベルクソンは、『二源泉』の中で自然が生命進化において生物個体に集団生活を行うように要求したと考える。なぜなら、『創造的進化』（以下『進化』）において主題的に扱われた生物進化の二つの線、本能と知性は、互いに「道具を利用することを本質としている」（DS 997）ので、道具を利用する働きが効率よく行われることを基本的な要求として持っており、集団生活はよりそれを促進するからである。

他方、道具は一つの仕事に充当させられているのであって、この仕事はそれが専門化していればいるだけ、したがって、相互に補完し合う質的に種々異なる職人の間で分担されていけばされているだけ、効果的 *efficace* である。（*ibid*）

つまり集団生活は、本能と知性の目的を効率化させるために自然が要求した契機に他ならない。その自然の要求に従って、本能を発達させたアリやミツバチは一個の巣を築き、知性の進化の「終点」、「目的」⁴である人間において社会を構成するという訳である。昆虫の巣と人間の社会は、本能と知性という異なる契機に支配されているので全く異なって見えるが、本質的に同一の目的を持つ契機なのである。

そのため、ベルクソンに言わせれば、アリやミツバチが自分の意志によって共同生活を行うことを選択したのではないように、人間も自らの意志で集団生活という生活様式を選択し

で社会を形成するのではない。人間は自然によって不可避免的に社会を形成するように仕向けられており、集団生活を行う上で「本能の成果に比することが可能であろう成果を獲得できるように」(DS 996)、自然が知性的な存在者である人間に対して道徳と呼ばれる行動規範を付与するのである。

この自然に由来する道徳は、「責務obligation」(DS 982)として我々の前に立ち現れる。なぜなら、我々個々人の行動を社会の維持のために制限することが道徳の本質に他ならないからである。知的存在者としての人間は、後に見るように、この責務を外的なものとして受け止める。アリヤミツバチがそうであるように、仮に人間が社会の規律の中に没入し、我を忘れることができるならば、我々はその道徳的責務を見ないであろうし、「仮構機能function fabulatrice」(DS 1067)によってもたらされる責務の宗教的裏付けも必要がないであろう。しかし、現実はそのようではない。自然が備えた契機であっても、我々はそれを外的なものとみなし、自身の行動を制限する障害として感じるのである。

2. 社会的自我

ただし、社会が要求する責務は、完全に外的な契機ではない。なぜなら、どれほど社会から自立した個人としての自己を意識したとしても、「我々各々は、我々自身に属しているのと同じくらいに社会に属している」(DS 986)からである。

ベルクソンは、自我意識そのものが自我の内に「社会的自我 moi social」(*ibid.*)の様相を持っていることに注目する。実際、単に人間が集団を為している状態を社会であると我々は考えることはないし、その集団に自身の身を置けば社会の成員になるとも考えていない。「我々自身の表面では他の人々とつながっていて彼らに類似しており、他人と我々の間に相互依存を生み出す規律によって他人と結びついている」(*ibid.*)という意識が、我々を社会に属していると感じさせ、その社会の個々の成員に社会の存在を認めさせる条件なのである。すなわち社会は、他ならぬ我々の自我の内にあるのであり、我々自身に強固な地盤を用意してくれるのである。

自分自身の社会化された部分に居を定めることは、我々の自我にとって何か硬固なものにしがみつ়く唯一の方法だろうか。仮に、我々が他の方法では衝動と出来心と悔いの生活から逃れることができないとすれば、それが唯一の方法であろう。(*ibid.*)⁵

確かに我々は、社会的な秩序を無批判に受け入れ、社会的存在者としてのみ生きることに抵抗を覚えるとしても、自身の安定を与えるものであるならば、様々な責務をともなったとしても社会的自我を受け入れるのである。

ここでベルクソンは、二つの事例を提示する。物理的に社会から孤立していながら、社会

と心理的な接触を保っている人々の事例と、その逆に物理的に孤立してはいないが、社会との接触を断たれた人の事例である。前者はロビンソン・クルーソーの物語などに代表されるものである。無人島に流れ着いたロビンソン・クルーソーは二重の意味で社会の恩恵を受けることなくしては生存しえない。一つは漂流物として流れ着く社会文明の産物の恩恵であり、もう一つが社会との「精神的な接触un contact moral」(DS 987)による恩恵である。ロビンソン・クルーソーは、無人島で自分の好むままに環境に対する新たな適応方法を探すよりも漂流物を探して利用する。そして「個人的自我に対する社会的自我の厳しさが少しも揺るがないようにするために、社会的自我を維持することに注意する」(ibid.)。たとえそれが全く島の生活に意味を持たないとしても、ロビンソン・クルーソーは自身が属していた文明社会の慣習や諸規律を無人島においても遵守しようと試みるのである。

一方で、自分自身が犯した犯罪を隠して生きる者は、それとは逆の状態を示す。犯罪者は犯罪が露見しないかぎり、隣人や知人と従来通りの生活をしている。しかしベルクソンによれば、犯罪者は孤立してはいないが、「無人島で彼を感じる孤独以上の孤独を人々の中で感じる」(DS 989)という。なぜならこの場合、隣人や知人たちが、罪を犯していない自分と接触していることを犯罪者は知っているからである。つまり自我の亀裂がここで判明になる。一見して他者との接触を保っているが、犯罪者の社会的自我は、その個人的自我とは別人になってしまう。そうなった時、「社会的自我と個人的自我との関係の混乱」(DS 987)から生じる「道徳的苦悩」(ibid.)に犯罪者はさいなまれることになる。そのため、犯罪者は、自らが犯罪者であることを宣言することで、その分裂を解消しようと試みる。当然、自身の罪を告白すれば犯罪に対して罰は下るだろうが、刑罰という形式の社会との接触を犯罪者は十全に味わうことを望むのである。

勿論、ベルクソンが言うように、犯罪者が自らの内面の危機から、容易に罪を告白するとは思われない。むしろ犯罪が報道され、人々の口に上れば上るほど、社会とのつながりを感じ、社会の人々を欺く自分自身に犯罪者は満足するかもしれない。しかし、ベルクソンは同様に別の箇所、「無聊ennui」(DS 1064)について触れ、ミツバチが巣穴から孤立すると衰弱して死ぬのと同様に、「社会から孤立し、社会の努力に十分参加できないでいると」(ibid.)人間であっても、精神的、心理的な異常状態に置かれることを示唆している。仮に犯罪を隠し通す中で、何も社会的な接触を得られないのなら、犯罪者はやはり不満を持つことになるのであろう。少なくとも、人間は社会に属することを自然によって定められた存在であり、社会から抜け出すことができないのである。

3. 社会的責務と習慣

社会的存在である限りにおいて、我々は社会からの要求である責務に従い、自身の行動を制限しなければならない。そのため、ベルクソンは、責務を「大部分は服従の習慣 des

habitudes d'obéir」(DS 982)であるとみなす。社会は、その成員である個人に、他の成員との相互補完的な働きを要求し、その働きの為に成員の個人的要求を抑え込むのである。そのため、しつけを受ける子供にとって、本来服従しなければならないのは親や先生ではない。親や学校の先生はその地位にある者として「委任されて行動している」(DS 981)なのであって、その委任先は間違いなく社会である。そのため子供は、どのような親や学校の先生であっても、相手が親や学校の先生という社会の定めた立場にある限り、服従を要求されるという訳である。

この時、社会が成員に対して何より厳格に禁止するのはエゴイステイックな振る舞いである。一匹のアリが、人間的な意識を持って「他のアリの為に働くことは全く間違いだと判断」(DS 995)し、さらに他のアリもそれに倣うとしたら、その巣穴に生きるアリたちは間違いなく全滅するであろう。人間の場合、高度に文明化し、より多くの成員を含むような社会に所属している限り、一人の人間の怠惰な行為によって社会の成員の全員が生存の危機に陥ることは少ないであろう。しかし、社会がそれぞれに割り振った役割を果たさないことは、全体を通してみれば危機的であることに違いはないし、当の個人にとって不利益をもたらすことになる。なぜなら「個人の為にその日常生活のプログラムを作成するのは社会」(DS 990)だからである。つまり、社会的な諸責務は補完し合いながら機能しており、一つの責務に従わないことが連鎖して、日常生活上の利便性が失われることも想定できるのである。たとえば、行列に割り込みを行う者は、列に並ぶ責務を自分以外の人々が守っている限りで利得を得るだろう。しかし、規則違反が常態化し、全員が行列に割り込む者に変化したなら、最終的に誰も利得を得られない可能性が増えるばかりか、損失を受けてしまうことは明白なのである。

そのため、我々に課せられる責務はどれほど小さな責務であっても、「比較を絶するほど強力な責務」(DS 982)に連鎖しているものであり、重層的に我々のエゴイステイックな行動を制限する。しかし、次の引用する文は極めて奇妙である。

社会は周辺をしめ、個人は中心にある。中心から周辺に、あたかも段々と大きくなる同心円のように、個人が属している様々な集団が配置される。周辺から中心には、その円が狭まっていくにつれて、責務に責務が加わり、最終的に個人は責務の総体を前にした自分を見出す。だんだん前進するにつれて、このように責務は増大する。しかし、この責務はより複雑であるほど抽象的ではなくなり、それだけより受け入れることが容易になる。(DS 989-990傍点引用者)

傍点を付けた箇所注目して欲しい。ベルクソンは、責務が増大していけばいだけ、受け入れやすいと考えている。一体これは何を意味するのだろうか。

我々はよき父親、よき友人、よき同僚、と言った生き方を求められ、それに伴う責務をこなして生活するが、よき父親としての責務とよき同僚としての責務が乖離している訳ではない。同心円状に配置された責務の例が示すものは、よき父親であるための責務は、それ単独で成立するのではなくして、よき友人、よき同僚としての責務が重なって初めて成立するということである。つまり、その個人が直面する役割が個人的なものに近づけば近づくほど、多層的ないくつもの責務を遵守することが求められることになる。したがって、本来一般的な責務ほど責務の強力な制限を受けず、責務の量は少なくなるはずである。しかし、傍点で示した部分のベルクソンの主張は、責務の量が少ない状態よりも責務の量が多い方が受け入れることは容易だ、と言っているのである。

ここでベルクソンが責務に対して習慣という語を用いていたことに注目しなければならない。つまり問題となるのは責務の質に他ならない。責務の量が多いほど個人に対する制限も増大するが、それは抽象的ではないので、具体的な我々の習慣によって対応しやすいということをベルクソンは述べているのである。

仮に、常に義務devoirについての観念を思い起こし、常に警句を言い表す必要があるならば、自分の義務を果たすことがあまりにも骨の折れることであるだろう。しかし、習慣だけで十分なのであり、社会が我々に期待しているものを社会に与えるためには、殆どの場合、為すがままにする *laisser aller* だけのことなのである。(DS 989)

一般的に社会が課す責務に対して、為すがままにするだけで十分とは⁶、我々には思われえない。しかも知性的存在者としての人間の行為であるならば、カントが示したように、責務は知性的体系の形を採って我々の前に提示されなければならないもののように思われる。しかしベルクソンは次のように述べる。

つまり絶対的な定言的命令は、本能的な、あるいは夢遊病的な性質のものである。それは、通常の状態において、このようなもの【本能的、夢遊病的なもの】として演じられ、その理由づけを探し出せるほど長い間ではないが、はっきりと定式化できるほどの長い間、仮に反省が目覚めているとすれば、そのようなもの【定言的命令】として表象される。(DS 994【 】内は引用者補足)

ベルクソンにとって定言命法の形式で下される「為さなければならないから、為すべきである」という最上位の責務の命令は、全く知性的なものではない。純粋な責務は、本能的、あるいは催眠術にかかった人が夢遊病状態で対応されるのであって、理由らしい理由も責務の実施の後で付けられるものである。「責務の本質と理性の要求は別のもの」(DS 994-995)

なのであり、ベルクソンに言わせると、習慣の形式をとる責務が先に存在し、その責務にエゴイズムに基づいて抵抗する個体に対して下される「抵抗への抵抗」(DS 992)が、知性的な形式をまとった責務の命令なのである。それゆえ、我々は責務が増大し、取るべき行動が明確に指示されればされる程、アリやミツバチのような仕方で対応しようとする。服従の習慣によって、文字通り演ずべき役割を果たすのみであって、知性的な概念を用いての理由づけのような作業が要らなくなる。責務をより容易に受け入れる、あるいは為すがままにすることで責務を果たす、とはそうした事態を指す言葉なのである⁷。

4. 知性とエゴイズム

以上、検討したベルクソンの責務に関する議論に、我々は知性に裏付けられるエゴイズムの議論を加える必要があるだろう。実際、我々は、責務を為すがままに任せるだけで事足りる服従の習慣であるとみなすことに容易に首肯できない。なぜなら、ベルクソン自身も「社会的な枠の中に身を置くことは比較的容易であるにしても、この枠に身をはめ込まなければならなかったし、はめ込むことには努力は必要」(DS 991)であると注意を發しているからである。この社会の枠の中に身をはめこむ努力とは何を意味するのだろうか。

我々は、その努力の根拠を知性的存在者である人間が、責務の遂行にあたって、通常の知性的活動の停止を要求されるから努力が必要、と考えることが許されるであろう。

そして、もっとも強力な習慣、集められたあらゆる力によって作られ、あらゆる社会的習慣によってつくられた力をそなえる習慣は、必然的により本能を模倣する習慣である。(DS 996)

自然は、我々人間を知性的な存在にしておきながら、社会の要求にこたえて道徳的に生きようとする際には、本能を模倣した習慣に従えと命じている。この相反する要求によって我々人間は、道徳に従うことの困難さを不可避的に感じるのである。

そもそも、知性の社会の責務に対する外化の働きは、知性が自然や生命に対して自らを外化させる働きに根拠を持っている。『進化』で明らかにされたように、知性は、「非有機体的な物質そのものを、付属物として諸有機体に与え、生物の術策によって非常に大きな器官に変えること」(EC 632)を目的としたものである。自身の目的遂行に合わせて非有機体を有益な道具とするために、知性を持つ有機体は有機体でありながら、非有機体の秩序を受け入れる。したがって、知性を持つ有機体は、自らも有機体でありながら「生命を外から眺め、生命に対して自らを外化する」(*ibid.*)のである。自然が備えた社会の要求に対して、本能に従っている生物が本能の示す秩序に没入可能であるのに対して、知性的存在が没入不能であるのは、この外化の働きがあるからに他ならない。知性的存在は、自らが為すべきことに

対して、自然が配した社会から直接的に自身の内から行為の規範を受け取ることはできず、試行錯誤しつつ個体自身がそれを身に着ける他ないのである。つまり、知性的存在者である人間は、外敵や環境に対する対処方法のみならず人間同士の共同生活上の規範を自然から十全に得てはいない。しかしその「不十分さinsuffisance」(EC 616)こそが、意識を目覚めさせる土壌として不可欠であることをベルクソンは注意する。つまり「意識とは躊躇、または選択を意味する」(EC 617)のであり、アリやミツバチのように社会の要求に一定の仕方で応えることが不可能であるように、人間は自然に仕組まれているのである。

そのため知性は、我々に個人的な意識を目覚めさせ、社会の要求を個人の利益追求を阻害する外部の障害として認識する。その相反する条件の下で知性はどのように機能するのだろうか。

それでは知性は何を為そうというのか。それは個体がおのずと生の諸困難から個体を救い出すために使う能力である。すなわち知性の能力は、個体と反対に種の為に働く力、そして仮に個体を考慮したとしても、種の利益内で個体を考慮する力の方向には従わない。知性は利己主義的な *égoïstes* 諸解決に直進するだろう。(DS 1053)

知性が、責務に知性的な根拠づけをするのは、自身のエゴイステイックな行動傾向に変更を加えるためである。つまり、エゴイズムに突き進む自分を他人に受け入れてもらうために、他人のエゴイズムにその取り分を認めるよう巧妙に立ち回る「利口なエゴイズム *égoïsme intelligent*」(*ibid.*)に自らのエゴイズムを変化させるのである。そのため、どれほど忠実に社会が命じる責務を遵守しているように見えても、知性的存在者は、自らのエゴイズムを満足させるために責務を果たしていると指摘することができる。知性的存在者において、自己満足が全く得られない中での責務の遵守を考えることは、本質的にできないのである⁸。

5. 責務に対する知性の優位

そして、自然が要求する責務は、知性的なエゴイスト達によって容易に裏切られる。

我々がそのことで理解しているのは、自然は知性による社会生活の一定の拡張を予見してはいたがその拡張は限られたものだった、ということである。自然はそうした拡張が本来の構造を危険にさらすまでに至ることを欲し得なかった。その上人間が、賢明であるが極めて素朴さをもはらんでいる自然を欺いた場合も多い。(DS 1022)

ベルクソンがこの箇所では具体例は、生殖に関するものである⁹。自然は、人間にも他の生物がそうであるように、個体数を増す目的のために生殖行為を行うことを要求する。しかし、

人間において生殖行為と個体数の増加は切り離される。生殖行為に備えつけられた快樂のみを獲得し、個体数を増やすという目的の達成は捨て去って当然であるかのように行為可能なのである。このような行為は本能によって生殖行動を行う生物種ではほぼ考えられない、自然の目論見を人間が欺いた端的な事例であるとされる。しかし、このように自然を欺く生殖行為を、人間社会の視点から見た場合、不道徳であると一方的に非難することは不可能である。自然から見た場合には、自然の与えた果実を一方で受けておきながら、自然の本質的命令には従わない重大な背信行為であるように思われる。しかし、人間社会においてはそうではない。自然の要求である個体数の増加を統制しつつ生殖行為を行うことは、時と場合によっては徳に基づく行為とさえみなされるであろう。この事態について自然が、知性的存在者の大いなる裏切りであると嘆いても、もはや自然を欺いた者たちの道徳の方が優位しているのである。

この優位は、自然に基づく社会の要求する責務が「知性以下」と呼ばれることから明らかである。

我々は、道徳において純粹に静的なものは知性以下のもの *l'infra-intellectuel* であり、純粹に動的なものは知性以上のもの *supra intellectuel* であることを見た。前者は自然によって望まれたもの、後者は人間的な天才のもたらしたものである。前者は人間において動物の若干の本能に対照的に対応する習慣全体を特徴づけるものであり、知性よりもより少ないものである *il est moins qu'intelligence*。(DS 1029)

この、「知性以下」、「知性より少ない」、という比喩表現が指し示しているものは、大きな解釈の余地を生むだろう。しかし、先に見たように、知性が意識の個人的な解放を指し示し、エゴイスティックな解決を目指すものであるなら、知性より下、あるいは知性より少ないと呼ばれる語の解釈の中心線を知性の支配下にあるものと読み込むことができるであろう。つまり、自然が配置する社会的責務は、人間の知性の働きの下に、従属してしまうものなのである。我々がすすんで自分のエゴイスティックな要求のために社会の要求を無視したり、自然を欺いて新しい道徳を生み出したりすることができるのは、知性の方が人間の行動を基礎づけるにあたって上位に機能するからに他ならない。そして皮肉にも、この知性の働きは、裏切られる自然によって備え付けられた、という点も忘れてはならない。いわば我々人間は、自然によって自然を裏切る性質を付与された存在なのである。

6. 閉じた道徳の自然性

以上のような検討を経て、自然が与える責務に基づく道徳と閉じた社会の道徳についてみてみよう。ベルクソンは、「自然的なものは、もっとも文明化した社会の中でもとてもよい

状態で、極めていきいきと保持されている」(DS 999)とし、その自然が「常に望む」(1001)ものは、限られた数の人間をのみ許容する閉じた社会であることを主張する。

どれほど巨大なものであろうと国家と人類の間には、有限と無限、閉じたものと開いたものとの隔りがある。(DS *ibid.*)

そのため、どれほど成員の量的な拡張を行っても人類全体を包括するような責務を考えることはできない。両者の間には、「もはや程度上のものではない本性上の差異」(DS 1002)が存在しているのである。文明社会が平和や愛の大事さを謳ったとしても、「それでもやはり、社会はそうした【敵に対する備えを規律化する】原始的本能 – 社会はそれを非常に厚いニスで覆いはするが – を必要とする」(DS 1001【 】内は引用者補足)と、ベルクソンは断言する。そのため、自然が求める社会道徳は、一方で「他人の生命や所有権を尊重するという義務」(DS 1000)を成員に厳しく要求しておきながら、他方で「排除を含み」(DS 1007)、「闘争を唆す」(*ibid.*)ことを当然のように行う。

それに答えるには、戦争時に何が起こるかを考えてみれば十分である。殺人や強奪が、また裏切りや欺瞞や虚言も、単に合法になるだけではない。賞賛に値するものなのである。戦闘員はマクベスの巫女たちのように、正しいが不正で、不正が正しい、と言うだろう。仮に社会がそれまで我々に強く勧めていたものが、真に人間の人間に対して採るある態度だったとすれば、こうした全面的で瞬間的な変化が容易に生じるだろうか。ああ、我々は、社会がどう言うかを（繰り返して言うが社会がそういうのはもっともである）知っている。しかし、社会が何を考え、何を欲しているかを知るためには、社会の言うことには耳を貸し過ぎないで、その行うことに注目しなければならない。(DS 1000-1001)

自然が目指す閉じた社会は、敵と味方を分け、全く異なる態度で臨む責務をその成員に課しているのである。

どうしてこのようなことが起こるのだろうか。石井はこの点について、「共有された言語、生活様式、道徳観、制度等、要するに集団を基礎づける「同質性」¹⁰に注目している。この同質性が担保される限りで我々は、目の前にした他人を仲間として扱い、同質性が担保されない場合、それを敵としてみなすという訳である。しかしまた、この同質性は固定的なものでないことは明白である。異質な外部の敵は、その場面によっていくらかでも変更される。自身のコミュニティの中に異質性をもたらすよそ者を排除するのは正しいとしても、同質性と異質性を区別は可変的で、そうであるがゆえに様々な小集団が無限とも言える闘争を繰り返すのである。

このような事態は、基本的に自然がもたらす責務が、エゴイズムを中心に展開されているからであると言えるだろう。責務は、個人のエゴイズムを制限するものであるが、事実として社会の要求する責務にもエゴイズムが認められるのである。

人間は社会と一体をなしており、両者はともに個人的保存と社会的保存という同一の仕事に没頭している。両者は自分自身に向いている。…中略…細胞は、有機体に活力を与え、また有機体に活力を与えながら、自分の為にも有機体のためにも生きている。細胞は必要とあれば、全体のために自ら犠牲となるだろう。そしてその際、その細胞は、もし意識を持っているとすれば、疑いもなく自分が犠牲になるのは、自分自身のためであると思うだろう。(DS 1006傍点引用者)

自然において、個体と集団の間の連帯が不変の緊密さを帯びているのは、自分自身の利益と社会の利益が一体化しているからに他ならない。知性的存在である人間の場合、社会との結びつきは可変的で、本能のそれに比べて弱まりはするが、ベルクソンは「我々が固有の意味での責務を結びつけたのは、このような【個体と巢の利益を結びつける】根本的な本能である」(ibid. 【 】内は引用者補足)と明言しているのである。

このことは何を意味するのか。閉じた社会を閉じたものにするのは利益の共有という点に集約されるということに他ならない¹¹。つまり、利益を共有できる範囲が閉じた社会の限界点なのであり、利益の共有が可能でなければ、それは外部ということになる。事実、ベルクソンは、自然が「人間は極めて小さい社会 *très petites sociétés* のために作られた」(DS 1209)ことに注意し、この社会が戦争を通して拡張するありさまを取り上げている。この共有可能な利益の享受こそが、社会を閉じる傾向性の根拠なのである。アリやミツバチの場合、個体的意識が目覚めていないがゆえに、集団の利益が純粹に個体の利益になる。その集団は必ずエサの獲得などの様々な自然的な制限が拡大を阻止するために、有限にならざるを得ない。人間の場合、自然的制限を克服するだけの技術を、個人的な意識を知性によって獲得しているが、本質としてアリやミツバチの巢となんら変わらない。そのため、戦争によってどれほど巨大な社会を形成しようとも、その実は小集団の「稀に持続的である」(DS 1210)連合に支えられてのことなのである。小人数の成員に共有される「部族のエゴイズム *l'égoïsme de la tribu*」(DS 1211)は、それがエゴイズムであるがゆえに、我々個人の持っているエゴイズムと同様に機能する。つまり、意識を目覚めさせた知性的存在者にとって小集団のエゴイズムは、個人のエゴイズムと同様に不可避免的に受け入れなければならない道徳規範の根拠なのである。

ベルクソンは、閉じた社会が、我々に「快樂 *plaisir*」(DS 1018)、「安楽感 *sentiment de bien-être*」(DS 1024)、「＜自己＞尊敬 *le respect 《de soi》*」(DS 1032)といった利益をも

たらしめてくれることを指摘する。このことは裏を返せば、獲得できる快樂等に合わせて我々はその都度、自身の属する社会を閉じるということにもつながるだろう。つまり、戦争において我々は国家に属して働くことに快樂等を見出し、味方を愛し敵を憎むが、一方で平和な時にはその国家の中、地域の中、あるいは友人たちの集いの中で、快樂等を満たす者同士で集団を作り、他の人や人々を排除する。「自然は【小さな社会と】同様に戦争を欲した」(DS 1210【 】内は引用者補足) のであり、閉じた社会と同様に「戦争は自然的」(DS 1217) で、「戦争本能 l'instinct guerrier」(*ibid.*) が存在するのである。自然によって与えられた社会を閉じる傾向は、エゴイズムによって自由に改変可能であるが、一定成員をしか含まず、絶えずその外部と争い続ける。石井が注目した同質性は、利益の共有を成り立たせる基礎的な契機として機能しているが、それは必ず有限なのである。

7. 結

閉じた社会は自然によって目指されていたものであるがゆえに、我々の社会のあり方に強力に作用するが、決定的なものではない。なぜなら序で示したように、これは我々の道德の源泉の一つであり、全てではないからである。もう一つ質的に区別される道德の源泉、「自然の計画に含まれていなかった」(DS 1022) 道德、圧力の感情としてではなく「憧れまたは飛躍の力 la force d'une aspiration ou d'un élan」(DS 1018) によって個人を動かし、快樂ではなく「歡喜joie」(*ibid.*) をもたらす道德が一方で存在する。ベルクソンは、この異なる性質を持った二つの道德が、権利上は分けられるが事実として協働していること、完全に閉じてもいないが完全に開いてもいない「開かれつつある魂 l'âme qui s'ouvre」(DS 1028) の状態があることを指示している。それはつまり、純粋な仕方で閉じた社会の道德と開かれた社会の道德が機能していないことを意味している。閉じた社会の責務に開いた魂の呼びかけの性質が、開いた魂の呼びかけに責務の性質が付与されるのである。したがって、我々は、「二文法の法則 loi de dichotomie」(DS 1227)、「二重狂乱の法則 loi de double frénésie」(*ibid.*) によって、質的に異なる道德の源泉から生じる傾向性を行き来しており、完全に閉じた社会の責務に支配されていないのである。

しかし、先に引用した「社会が何を考え、何を欲しているかを知るためには、社会の言うことには耳を貸し過ぎないで、その行うことに注目しなければならない」というベルクソンの言葉は、我々に重い課題を投げかけるだろう。ベルクソンは、『二源泉』に先立つ半世紀も前に、「礼儀正しさ La politesse」と題された式典授与式向けの講演を行っている¹²。その中で、礼儀正しい振る舞いが習慣によって行われることを述べ、「優美さ」(M 322) や「柔軟さ」(M 324) によってそれが象徴されるという。しかし、こうした優美さや柔軟さには「自己愛」(M 323) が見いだされ、ベルクソンはそれとは別の礼儀正しさ、「他の人々と我々を満足させる」(M 326) ような礼儀正しさを徳とみなす。半世紀後のベルクソンは、この

帰結に満足するだろうか。我々が異質性を持ち込む他者に向かい合った時、美しい言葉を駆使した礼儀正しさに応じるなら、一見して道徳的に正しいことが為されているかのように考える。しかし、排除や闘争心をあらわにした行為ではないからといって、それが閉じた社会の道徳ではない、ということにはならない。自己中心的な快樂のために、単にそうしているだけにすぎない可能性がある。我々の知性が自然を欺く時、必ず開いた社会に目を向ける訳ではない。自然は我々をどちらの道徳にも属さず、全く不道徳になる自由をも与えてしまったことにも注意すべきなのである。知性は、巧妙にそれを取り繕い、我々のエゴイズムについて自己弁護する道具立てをいくらかでも用意することができるのである¹³。

グローバル化による多文化、多価値の共生を謳いつつもそれが利益を刺激するのみであれば、それは所詮エゴイズムの拡張であろう。その場合の道徳は、一方で他なる人々を自分の利益の為に受け入れつつも他方で排除や闘争を否定しない、利口なエゴイズムの枠を逃れることはできないであろう。1932年のベルクソンは、民主主義という政治体制、あるいは国際連盟といった組織に希望を見出そうとしているが¹⁴、現代社会を見る限り、閉じた社会はますます混迷しながら今も続いていると言わざるを得ない状況である。今、再びベルクソンの閉じた社会論に耳を傾け、その自然に由来する根強さに一瞥を払うことが必要なのではないだろうか。

¹ 使用したベルクソンのテキストは、Bergson.H., 1991, *HENRI BERGSON ŒUVRES* 5e édition, Presses Universitaires de France、Bergson.H., 1972, *HENRI BERGSON Mélanges* 1er édition, Presses Universitaires de Franceである。収められている著作、論文に関しては、以下の略語を明記し、引用箇所や参照箇所のページ数を明記する。また、2007年から版を改めて出版されたQuadrige版も適宜参照した。

L'Évolution créatrice…EC

Les deux sources de la morale et de la religion…DS

Mélange…M

² ベルクソンは「原始的」という語を「文明的」という語と対比させ、『二源泉』で何度も用いているが、それは理念的な意味で用いられるのであって、価値的な意味を含まない。いわゆる原始的な心性は、自然が備え付けた本性に近いが、スペンサーの社会進化論に対してベルクソンは批判的な目を向けている。DS 1206-1209参照。また、レヴィ＝ブリュールの研究についての言及も参照されたい。DS 1062, 1096-1104等参照。また、デュルケム、レヴィ＝ブリュール等の社会理論とベルクソンの理論の距離を測るために、Keckによる検討を参照。Keck, F., 2004, *Présentation générale de l'ouvrage, Les deux sources de la morale et de la religion Bergson, A., Bouaniche, F., Keck, F., Worms, ellipses, pp8-16* 参照。

- ³ 『二源泉』の発生論的な主張に重点を置いて検討した解釈として、大崎の検討がある。この中で大崎は、ベルクソンが道德と宗教を実体的なものとして扱わず、『進化』に特徴的に見られるベルクソンの二つの異なる傾向性の対峙から、具体的な道德規則や宗教的規範が生じていることを明らかにしている。大崎博、2015、『ベルクソンの道德・宗教論』、成隆出版、とりわけ第一章 pp37-73参照。
- ⁴ 『進化』において、「このまったく特殊な意味において、人間は進化の《終点》、そして《目的》である。」と述べられる。EC 720参照。
- ⁵ この時ベルクソンが別の方法として示唆するのは「表面的均衡よりももっと望ましい他の種類の均衡」(DS 987)を得ることである。この点については、*Essai sur les données immédiates de la conscience*の有名な「自我の二つの相」の議論(pp85-92)から継続している問題である。深奥に存在する本来的自己に達することは極めて難しく、他者に接触している表面的な自己の相から我々は安定を得ようとするのである。
- ⁶ 実際、laisser allerは、本論で注目したロビンソン・クルーソーの物語の検討箇所では苦痛の原因ともなっており、この二つの対比は非常に興味深い。習慣に身を任せて為すがままにすることと、自分自身のみを根拠として為すがままに任せることでは、質的に全く異なることなのである。DS 987参照。
- ⁷ 勿論、具体的な責務に基づく行為の全てが非知性的なのではない。ベルクソンは、責務が知性によって種々の命令に分解され、吟味されるのは自分にその命令を言い聞かせる時であると言っているのである。そのため、まったく自然に、意識しないような仕方で社会が示す道筋に服従すればよいだけの場合と、社会が示す道筋に対して「どの道を探ろうか、どの地点まで行こうか、次々に多くの道に入り込む場合はどれほど往復の行程になるだろうか」(DS 993)を反省し、思案する場合は同一ではない。また、2007年から版を改めて出版されたQuadrige版の『二源泉』の付録としてつけられた、lectureに収録されている、1934年のNabertの検討は、閉じた道德を支配する「潜在的本能」と知性の関係性に注目している。Nabert, J., 1934, 《Les instinct virtuels et l'intelligence dans *Les deux sources de la morale et de la religion*》, *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008, Presses Universitaires de France, Quadrige, 605-612参照。
- ⁸ エゴイズムを否定しない功利主義的な道德は、この問題に大きな補助線を与えてくれる。功利主義が否定するのは、ある個人の自己中心的な振る舞いが、より多くの個人のエゴイズムを破壊するような場合のみである。仮に個人のエゴイズムを満たす行為が、より多くの人々のエゴイズムを満足させるとすれば、それは賞賛される行為とみなされる。「利口なエゴイズム」とは、このようなものであろう。DS 1006 参照。
- ⁹ ここでもう一つの重大な自然に対する人間の欺きが指示される。生殖の事例に示される欺きと「全く異なる意味での」(DS 1023) 欺きが自然の計画にはなかった、開かれた魂の存在である。基本的にはエゴイズムを免れない知性的存在者であるにもかかわらず、開かれた魂の持ち主達は、

自然の想定を超えた方向に進むのである。

- ¹⁰ 石井敏夫、2007、「ベルクソンの「閉じた社会」論」『ベルクソン化の極北』理想社、pp86-112参照。この中で石井は、今日の問題として、外国人労働者の問題、地球環境汚染の問題、ナショナリズムの問題を取り上げている。1993年に書かれたこの論文が念頭に置いていた社会のありようと比べて、今日はより一層閉じた社会が進行しているように石井には見えるのではないだろうか。
- ¹¹ この同質性をめぐる議論において、ベルクソンは相互理解によって、とりわけ「言語、文学を深く知る事」(DS 1218)によって自然の要求する戦争本能を欺く可能性を示唆している。しかし今日の状況を見る限り、エゴイズムによる閉じる傾向を相互理解にどこまで開くことができるか、困難な問題であるように思われる。
- ¹² *Mélanges*には1885年版の原稿と1892年版が示されており、引用した箇所は1885年版の原稿にのみ登場し、1892年版では別の表現に改められている。
- ¹³ 二つの道徳の源泉に対して知性は、道徳的命題を巧みに演繹し、一般的な道徳を導き出す。DS 1203-1206参照。
- ¹⁴ 『二源泉』第四章、とりわけ自然的社会の強力さについて述べた後の後半部、DS 1213以降の箇所を参照。ベルクソンの主張の趣旨としては、過度に閉じた社会の道徳が充進し、戦争本能が発揮される場面が展開した場合、それに対立する道徳の働きが促されるであろうとされている。しかし、現実には世界連盟が崩壊した過去の事実に加え、民主主義の機能不全的な状況が展開している現代において、ベルクソンの主張の現実性は問題視されるであろう。なお、ベルクソンの理論から引き出される民主主義の脆弱性については、Švec, O., 2012, *La fragilité de la démocratie face au défi de la technique, Annales Bergsoniennes V Bergson et la politique : de Jaurès à aujourd'hui*, F., Worms, ed., pp297-310参照。

Sur la nature de société close dans *Les deux sources de la morale et de la religion*

NAKANE, Hiroyuki

Dans *Les deux sources de la morale et de la religion*, Bergson dit que, la nature désire la société close qui est constituée de les systèmes des devoirs diverses. Les individus dans la société doivent se subordonner les uns aux autres, et obéir aux exigences de la société comme les fourmis ou les abeilles. Mais, la société close n'implique que les individus en nombre limité, et n'embrasse jamais l'humanité entière. C'est pourquoi, d'un côté, les obligations de la société close aux individus font accorder avec les autres qui sont en un certain même groupe, d'autre côté, elles leur incite à exclure et à lutter avec d'autres.

Pour quelle raison la nature veut donner à l'humanité l'exclusion et la lutte ? Si la nature fait close la société, c'est parce que la nature veut faire obtenir à les individus et à la société l'intérêt qu'est d'autant plus sûr que le lien social est fort. Selon Bergson, les individus et la société tournent eux même naturellement, et l'intérêt égoïste n'a jamais besoin de la charité avec l'humanité entière. L'obligation de la société close qui cherche à assurer l'intérêt individuel survit très fort dans le monde aujourd'hui, nos yeux n'ouvrent guère à l'humanité entière.

mot-clefs :

la nature, l'obligation, la société close, l'égoïsme